



# 名曲の向こう側

第1回

□ ローベルト・シューマン (1810—56) のインスピレーションの源は、名ピアニストにして最愛の女性、クララの存在でした。文学青年ローベルトは、作曲のなかで、特定の音型とか、ほかの作品からの引用にクララへのメッセージを込めたり、言葉を音名に読み替えて作品のモチーフにしたりしました。たとえば、「リーダークライス」作品39では、EHE (ドイツ語で「結婚」) が調性や音名で象徴されます。きわめて個人的でインティメイトな世界です。当事者だけに伝わるメッセージが暗に埋め込まれていたりして、それを譜面から読み解くのは、あたかも恋人同士のLINEを覗き見しているようなスリルがあります。

2人の交際は、クララの父親フリードリッヒ・ヴィーク (ローベルトのかつての師) の執拗な妨害と、法廷での泥沼闘争を乗り越え、1840年9月、ついに結婚へと漕ぎ着けます。

「ミルテの花」作品25は、結婚式の前日にローベルトがクララにプレゼントした歌曲集。ミルテは花嫁のブーケに使われる白い花で、苦難の時期、結婚への想いを語るローベルトの手紙の中にも再三登場していました。

曲集の冒頭を飾るのが、有名な「献呈」。「きみは僕の魂、僕の心 (Du meine Seele, du mein Herz) !」という、リュッケルトの詩による熱烈なラブソングです。この曲の後奏に、なにやら聴き覚えのある旋律が現れることにお気づきでしょうか？ そう、フランツ・シューベルト (1797—1828) の「アヴェ・マリア」の旋律です。

この曲は、クララのコンサート・レパートリー (ピアノ独奏版) であり、同じ1840年2月12日のクララの手紙の中で登場しています。前日のハンブルクでの演奏会の報告です。「あなたが今日のこのお便りをお書きになっていらしたとき、わたしの演奏のはじまる一時間まえに会場ですれを受け取るようになることまでは、予感なさっていらっしやなかったでしょう。お便りにどんなに元気づけられたか口にはあらわしきれません。」

## シューマン「献呈」

内藤 晃



「『アヴェ・マリア』はたいへん人気を博しました。わたしがとても美しく弾いたせいもありますが—それもあなたのくださったお便りのことをずっと考え続けていたためです。」

この日クララは、会場のピアノのコンディションが悪くナーバスになっていました。そんな中、開演直前に届いたローベルトの手紙が心の支えになり、演奏会を成功裡に終えることができたのです。シューベルトの「アヴェ・マリア」の演奏はとりわけ聴衆に感銘を与え、この演奏会のハイライトとなりました。数か月後、ローベルトから贈られた「献呈」の後奏部分に、あの思い出深い「アヴェ・マリア」の旋律を初めて認めたとき、はたしてクララの心にはどんな想いがよぎったのでしょうか？

出典＝『ローベルト＆クララ・シューマン 愛の手紙』ハンス＝ヨーゼフ・オルタイル編、喜多尾道冬・荒木詳二・須磨一彦訳、国際文化出版社、1986年

推薦盤：ディートリッヒ・フィッシャー＝デイスカウ (バリトン) クリストフ・エッセンバッハ (ピアノ) [DG] =両者の「語るような」アンサンブルによって、含蓄のある詩的な世界が体現されています。

内藤 晃 (ないとう・あきら)  
ピアニスト・指揮者・作曲家。

「もっと深い音楽体験」への道案内をライフワークとし、独自の切り口による講座やレクチャーコンサートが好評。オーケストラの弾き振りも行。『おながくしつリオ』主宰。



(イラスト＝◎いとう まりこ)